

2020年 豊岡市賀詞交換会 市長新年あいさつ

明けましておめでとうございます。

快晴です。今年1年が皆さんと豊岡市にとって快晴の日が多い年になることを心から期待したいと思います。

昨年も日本の各地で自然が猛威を振るいました。大きな火災もありました。明日は我が身かもしれません。お互い緊張の糸をぴんと張って、力を合わせて、このまちの安全と安心を守り抜いていきたいと思います。

台風23号で多くの支援を受けた経験を持つ豊岡市としては、被災地の支援も大切な役割です。昨年の台風の関係で、宮城県大崎市、長野県上田市には、技術職員を合計3名、今月末まで派遣しております。また、東日本大震災の被災地、宮城県南三陸町には発災以来、今日も職員を派遣し続けております。復興事業が完成をする新年度末まで、市職員を派遣することにしております。自らを守りながら仲間を助ける。その姿勢で取り組んでいきたいと思います。

今年私たちの周りには、大きな課題がたくさん横たわっています。

喫緊の最大の課題は、公共施設マネジメントです。合併によってたくさんの施設を豊岡市は持っています。今後10年間にたくさんの施設が建て替え、あるいは大規模改修、長寿命化の時期を迎えます。ざっと10年前の単価で試算しても、今後10年間で必要な資金が約317億円。それに対し、豊岡市が用意できる費用は、せいぜい250億円程度。どうしても足りません。ないものはないとしか言いようがないような状況です。ですので、辛抱すべきは辛抱し、諦めるべくは諦め、守るべきものはしっかりと守り、同時に攻める余力も残しておく。そのことをしっかりとやっていきたいと思います。

昨年、この状況を率直に市民の皆さんにお知らせしました。たくさんの声が上がってきました。その多くは、私は困る、私はこの施設がなくなると不便であるというような声でした。当然のことです。普段多くの行政サービスを受けていただいているわけですが、そのサービスがなくなったり、小さくなることは困る。そういった声が一斉に吹き出てくるのは、そのとおりだと思います。しかしながら、他方で1つや2つの施設だけならまだいいんですが、学校、幼稚園、保育園、こども園、消防署、庁舎、あるいは市営住宅、消防団の車庫ま

で、たくさんのものがこれから建て替えなりの需要が出てきます。

私（I）は困るという問題を、いかに私たち（We）の問題にしていくのか。入り口はIであったとしても、出口はWe、豊岡市として全体をどのようにしているのか、そんなふうにもみんなで考えていきたいと思っています。IをWeに変えるプロセスは対話です。対話しかないんだろうと思っています。市民の皆さんの声に率直に耳を傾け、同時に私たち自身の考え方も率直に述べ、やりとりをする中でWe（私たち）を紡ぎ出していきたいと思っています。

今年も長期的な最大の課題は人口減少対策です。

豊岡市の人口減少の最大の要因は、若年層の圧倒的な社会減にあります。とりわけ、女性が帰ってきてないことが大きな課題になっています。豊岡に暮らす価値が若い人たち、とりわけ若い女性に選ばれていない。それが厳しい現実です。どこを選んでいるのか。最終的には東京圏です。豊岡と東京圏との間で、直接の人のやりとりはそんなに大きくはありませんが、おそらく大阪、神戸、京都等を中継した上で、最終的には東京圏に多くの若者が流れているんだろうと思います。

東京は今も若い人、人口を増やし続け、そして子どもの数を増やし続けています。日本で最も合計特殊出生率が低い東京が唯一、都道府県単位では子どもの数を増やしている。私たちはこのような厳しい現実と闘っています。生半可なことではこの闘いは勝ち抜くことはできません。圧倒的に突き抜けた豊岡に暮らす価値を、私たちは創り上げていく必要があります。高さや大きさや速さを競うような闘いでは私たちは決して、大都市に勝つことができません。それは別の次元で「小さくてもここで良いのだ」、そういう堂々たる態度を、突き抜けて創り上げていきたいと思っています。

その旗印が「小さな世界都市」です。豊岡という地域に深く根ざしながら、世界で輝く。その作戦です。そのためにはエンジンが要ります。私たちはこれまで小さな世界都市を実現するためのエンジン、世界に飛び立つためのエンジンを用意し、それを発動させてきました。第1のエンジンがコウノトリの野生復帰、第2のエンジンがコウノトリ育むお米の輸出、第3のエンジンがインバウンド、そして第4のエンジンが「深さを持った演劇のまち」です。もちろん、企業の中でも既に世界で高い評価を受けている製品を売り出している企業もあ

ります。そこも入れれば、第5のエンジンと言って良いのかもしれませんが。

永楽館歌舞伎は大人気となりました。城崎国際アートセンターには世界中から優れた一流のアーティストが続々とやってくるようになりました。日本を代表する劇作家平田オリザさんは、昨年の内に既に豊岡に移住され、今年の3月には活動拠点となる「江原河畔劇場」が完成し、オープンします。兵庫県において専門職大学の準備も着々と進み、順調にいけば今年の夏には文科省の認可が下りるだろうと思います。来年の春のオープンを目指して、準備が進められているところです。演劇に関するプレーヤーが揃ってきましたので、国際演劇祭も開催することにしました。今年の秋に、いよいよ第1回の国際演劇祭が豊岡で始まります。

それだけではありません。

豊岡の子どもたちは既に公立の小学6年生と中学1年生で、演劇の授業を受け、コミュニケーション能力につなげる取り組みが進められています。小学校低学年での、演劇のワークショップによる非認知能力の向上の取り組みも始まりました。単に演劇を見ることができて楽しいというだけではなくて、まちの隅々に、子どもたちの教育といったところまで演劇が役割を果たしていく。それが「深さを持った演劇のまち」です。

今まで豊岡にあまり縁のなかった分野ですので、一見ふわふわした話のように聞こえるかもしれませんが。しかしながら、相手は先ほど申しあげたような敵です。世界に輝くこのまちを創っていく必要があります。そのための第4のエンジンとして演劇のまちづくりということを打ち出しております。ぜひ皆さんにもこの輪の中に入ってきていただきたいと思います。

ジェンダーギャップの事についても少しお話をしたいと思います。先ほど、とりわけ若い女性に豊岡が選ばれていないということを申しあげました。女性の数以上に夫婦はできません。女性の数の減少というのは、圧倒的に豊岡の人口減少を加速します。その背景にジェンダーギャップ（社会的、経済的、文化的な意味での男女の格差）があります。豊岡の男社会の在り様が横たわっている、そう見えています。単に男女平等という美しい議論を言っているわけではありません。豊岡の存続に関わる話でもあります。しっかりとジェンダーギャップの解消に取り組んでいきます。そして何よりも、男性であろうと女性である

うと歳を取っていようと取ってまいと、障害があってもなくても、国籍が違って、文化が違って、肌の色が違って、自分のスキルを身に付けることができ、それを発揮することができ、まちの一員として役割を果たすことができる。そういうまちができた方が、活気に満ちて楽しいはず。皆さんと力を合わせて、そんなまちづくりを進めていきます。

今年はいよいよ東京オリンピックの年です。聖火リレーもあります。ドイツとスイスのボートチームの合宿も受け入れます。谷先生のお話では、東京オリンピックが終わった頃には、但馬空港の横まで北近畿豊岡自動車道を開通してほしい、そういった要望を出しているところです。私は、少し慎重に「カニが始まる前には」、と申しあげておりますが、いよいよ豊岡の中心部の懐深くに高速道路が入ってきます。

兵庫県では、但馬空港の滑走路の延長の検討が始まります。既に新聞で読まれたとおりだと思いますが、航空法施行規則が変わり、安全帯をあと100メートル延長しないと空港としての運用ができなくなる、その期限が2026年度です。それだけでも大きな土木工事を伴いますが、それでは現状維持。それならば、さらに上乗せして滑走路を延長し、ジェット機が就航できるようになれば、東京直行便の可能性が出てきます。地元としても力を合わせて、なんとしても滑走路の延長の実現ができ、東京直行便が実現するように頑張っていきたいと思えます。課題は本当にたくさんありますが、みんなで力を合わせれば必ず克服できる。そう信じて、今年1年を走り抜いていきます。

皆さんにとって今年1年が素晴らしい年になりますことを心から祈念いたしまして年頭の挨拶といたします。

ありがとうございました。